2020 年の誕生日を祝う

バーバ・ムクターナンダの物語

バーバは、「給仕し続けなさい。十分ある」と言いました――そして、本当にあったのです

1974 年の初め、私はバーバの第 2 回世界ツアーの時に、キッチンでセーヴァーをささげていました。ある日、バーバはキッチンにやって来ると、ツアーのコック、主任シェフを選ぶ時が来たと言いました。その任務に対して 2 名の候補者がいました――私ともう一人のコックです――そこでバーバは、私が「パン焼きコンテスト」と同じだと思う設定をしました。彼は候補者の一人が 1 日料理をしたら、もう一人が次の日に料理をすることに決めたのです。

もう一人のコックが料理をするといつも、バーバは、「この食べ物は素晴らしい！　君は一流のコック、今までで最高のコックだ！」と言ったものです。私が料理した時には、彼は一度もキッチンに入って来ませんでした。私は本当に落ち込み始めました。

その週の終わりに、バーバが私に言いました。「お前がツアーの主任シェフだよ」。私は驚きましたが、バーバが説明しました。「励ましてやらないと、もう一人のコックの方は仕事をすることができなかった。だが、おまえはしょっちゅう褒めてもらう必要がなかった。だから、おまえが主任シェフになるのだよ」

さて、これがバーバに関する次の話のための背景です。次の話を、私は決して忘れることはないでしょう。

1975 年のこと、私たちはおよそ 200 名の人々のために 7 月 4 日のお祝いの食事を調理している最中でした。バーバはキッチンに入って来ると、「あと何名か追加の客人が来ることになった」と言いました。

私は尋ねました。「何名ですか？」

「数百名だ」と、彼は言いました。「十分な食べ物があるかい？」

私は言いました。「全然足りません。十分な食べ物はありません」

バーバは言いました。「問題なのは、おまえには十分な信頼心がないということだ」。それから、彼は幾つもの鍋を数回トントンとたたくと言いました。「給仕し続けなさい。十分ある」

そこで、私たちはただ給仕し続けました…そして給仕し…長い時間食べ物を給仕し続けました。私たちは十分な量の食べ物を作っていなかったことを知っていましたが、鍋からはずっと食べ物が出てき続けました。本当に十分にあったのです。

© 2020 SYDA Foundation®. 著作権所有。